

膠着語の旅・抄（続）

夜久正雄

はじめに

一、膠着語の旅を終えて

二、アジア諸言語の分類について

三、ルンビニ村アショカ・ピラーの銘文は膠着語

四、ヒタイト語の統語法（語順）は膠着語

——『印欧アナトリア諸語概説』（大城光正・吉田和彦著）による——

五、「シナ・チベット語族」について

はじめに

本篇は本紀要第十四号（一九八七）所載の「膠着語の旅・抄」の統篇である。前論文において、次の諸国語が膠着語であることを述べた。

韓国語・モンゴル語・ネパール語・チベット語・ビルマ語・アイヌ語・ドラヴィダ語・ムンダ語・シンハリ語・バスク語

次の諸語は語形論の見地からは屈折語であるが、統語論（語順）からは膠着語である。

ヒンディー語・ベンガル語

次の諸語は非膠着語、孤立語である。

中国語・シヤム語・ベトナム語・カンボジア語・インドネシア語

なお和田祐一教授の「統語類型論」（昭和四五年）に拠ると、次の諸語が膠着語であるという。

ツングース語・ウズベク語・トルコ語・タミール語・マラヤム語（ドラヴィダ語）・ブルシャスキ語（インド北部カラコルム山中）・イジヨ語（ナイジェリア）・アルタイ語・ギリヤーク語・カザク語・キルギス語・カナダ語・オロチ語・タタール語・ウイグル語・ヤクート語

本篇は、一と二が総論的なもの、三と四と五が各論的なものである。三と四と五についてはそれぞれ本学研究所の所報に発表したものを補訂した。

一、「膠着語の旅」を終えて

——大野晉博士『日本語以前』（岩波新書一九八七年）に驚嘆——

（一）「膠着語」とは

「膠着語」とは Agglutinative Language の訳語である。

言語を形態の上から次の四つに分類する。——「膠着語」「屈折語」(Inflectional Language)「孤立語」(Isolating Language)「抱合語」(Incorporating Language)。

『広辞苑』を借りて簡単に説明すると次のとおり。（括弧内は筆者補記）

- 「膠着語」 語の文法的機能を、語根と接辞（助詞助動詞など）との結合連続によって示す言語。フィンランド語・トルコ語・朝鮮語など。（日本語・モンゴル語・タミル語なども）
- 「屈接語」 語形変化（屈折）によって、語の文中における諸関係を示す。（go went gone, I my me など）名詞・形容詞は性・数・格、動詞は人称・数・時制・法・態などに応じて一定の変化をなす。セム語（ヘブライ語・アラビア語・エチオピア語など）・インドーヨーロッパ語（インドーイラン語・ギリシア語・ゲルマン語（スエーデン語・デンマーク語・ノールウェー語・ドイツ語・オランダ語・英語など）ラテン語（イタリア語・フランス語・スペイン語・ポルトガル語）、ヒッタイト語など）
- 「孤立語」 語形変化によらず各語の文中における位置によって文法的機能を営む。中国語・チベット語（膠着語とも）・タイ語の類。
- 「抱合語」 動詞を中心にその前後に人称を表わす接辞や目的を表わす語が結合または挿入されて、一語で文

のような形態をとる言語。アイヌ語やアメリカ・インディアンの言語など。（分析的言語に対してそれ以前の原始的言語と考えられている。）

〔膠着語〕は、「ウラル・アルタイ語族」の特質とも考えられている。「ウラル語族」へフィンランド語・エストニア語・ハンガリー語などにサモイェード諸語を含めた語族「アルタイ語」へトルコ語・蒙古語・ツングース語を含む「語群。朝鮮語・日本語もこれに属するという。」（『広辞苑』）

この分類はドイツ生まれのイギリスの比較言語学者マックス・ミュラー（一八二三—一九〇〇）が、サンスクリット（屈折語）やトルコ語（膠着語）にふれて考え出した分類法と言われている。欧米学者にはトルコ語が非印欧系言語——「膠着語」として意識されたのである。

ミュラーの死が一九〇〇年ということ思い出したが、W・ヴント（一八三三—一九二〇）が「民族心理学」の第一巻『言語』を出したのが同年である。ヴントはこの『民族心理学』を、世界文化史として書き始めたのである。この精神は、後に、トインビー（一八八九—一九七五）の『歴史の研究』に継承されたとも見られる。

二十世紀は、ある意味では東西文明の具体的交流の初まりでもあったが、同時に、第一次・第二次世界大戦ならびに共産主義革命という大変動の時代でもあった。実に悲劇的な時代であったと言えるが、その中から各文明の相互理解の道を踏み出した、とも言える。そうでなければ、人類の文明は相互の戦いによって破滅するほかあるまい。

「屈折語」が、セム語ならびにインド・ヨーロッパ諸国語の共通の文法的性質とするならば、「膠着語」は「孤

立語」とならんでアジア諸民族語に共通な性質ということができる。

私の「膠着語の旅」とはそうした共通点を求めている旅でもあった。共通な点のあることを知ると、なつかしさが感じられるものである。

（二）「膠着語の旅」

私は昭和十四年（一九三九年）東大の国文学科を卒業した。国語学の橋本進吉博士が主任教授で、国文学主任は久松潜一博士、『源氏物語』研究の池田亀鑑助教授、俳句の志田義秀先生がたの教えを受けた。

国語学は専攻しなかったが、橋本先生の厳密な研究態度にはただ恐れ入るほかなかった。先生の講義のノートはいまでも大切に保存している。先生は、大東亜戦争下、配給制度を厳守した。そのため栄養失調で亡くなられた、と聞いている。国語について考える時、私はいつも橋本先生の教えを憶うものである。

しかし、当時、「膠着語」などという言葉はあまり使われていなかったらしい。国語・日本語が世界の中でどういう場所にあるのか、というようなことは私などほとんど考えなかった。

「日鮮同祖論」というのがあった。これは国語学者金沢庄三郎（一八七二—一九六七）が唱えたものである。たしかに日本の上代語に朝鮮語の借用かと考えられる言葉があったり、朝鮮語が日本語と同じ膠着語であったりするところから、何となく日本語の先祖が朝鮮・満州・興安嶺・モンゴルあたりに伸びるような感じがして、それがまた満州国の建国（昭和七年）に親しみを感じさせたのである。

しかしこれは厳密な検証——「音韻対応」——をともしない空想にすぎないと考えられた。

戦後は、敗戦によって、日本のすべてが否定されるような風潮が流れた。日本語は論理的でない、とか、ロ

マ字化するのがよいとか、ある文学の大家がフランス語を国語にしたらどうか、ということさえ言われたものである。

国語の表記法を变革することによって伝統的思想を切断することが、敗戦による連合軍占領GHQ軍政下、新聞雑誌図書の事前検閲下に強行されたのである。

「現代かなずかい」（昭和二十一年十一月公布）と「当用漢字音訓表」（昭和二十三年二月公布）との二つは、新聞・教科書に強制され、それまでの文献を無用化し、家庭における国語教育の伝統を破壊してしまった。「現代かなずかい」からすると「歴史的かなづかひ」はまちがいとなり、「正体漢字」もまちがいとなるからである。これで親子の断絶となった場合が多い。

“一字一句改めるべからず”と遺言して死んだ森鷗外作品を教科書に載せるためには、「現代かなずかい」に改めなければならない、そのため文部省の役人が、著作権者の遺族に改訂を懇願しなければならなかったりした。また大作家の全集ものなど、ただ「現代かなずかい」に改めるだけで刊行して大もうけするなど、笑えぬ悲喜劇が起ったのである。

文語を基調とする短歌や俳句まで「現代かなずかい」にするなども同じ混乱の結果である。

そんな国語の混乱の中で日本語の性質や系統がいろいろ語られた。ゾルゲ事件の生き残りの安田徳太郎の「レブチャ語起源説」^④（一九五〇年代）とか、数量言語学を提唱した安本美典氏の「日本語・ビルマ語相似説」（一九六〇年代）^⑤などが、心に残っている。言語心理学界でもスターリン言語学などがもてはやされたのもその頃のことであつた。

⑧（平成九年五月二十四日）TBS「世界不思議発見！」——「追跡・秘境ヒマラヤに日本人のルーツ？」で、現地調査が行なわれた。）

それらは自然に消えていった。何故かというところ、一言で言えば、日本語の系統を論ずる場合に、インド・ヨーロッパ諸語が、「音韻対応」という法則にもとづいて、体系化されたのに対して、日本語とよく似た言語があっても、そこに、「音韻対応」の法則を見出すことができなかったからなのである。

日本語と朝鮮語・モンゴル語など、文法的によく似た言語といっても、ドイツ語とフランス語などの間に発見される「音韻対応」の関係を見出すことはできない。

それで、私などは、日本語と周辺諸国の言語というものは、有史以前はるかに遠く分かれてしまっていて、とても「音韻対応」の法則でその系統関係をたどることはできないのだろう、それならば、ただ文法的に似ているという点だけでも、似た言語をたどってみよう、——そう思って、とぼとぼとたどった、それが私の「膠着語の旅」であった。

私は、アジア諸国の現実にふれるために諸国を訪問した。ひとつには、そこで死んだ同胞戦死者の霊に巡拝したかったことと、同時に、亡んだアジアの古代文明の遺跡に巡礼したかったからでもある。外国を訪問する場合には、少しでもその国の言葉を勉強して行くのが礼儀だと思ったから、少しずつではあったが、爾前にそんな勉強をした。

ところで、私の訪問した先は、韓国（朝鮮語）から始った。それからモンゴル共和国とつづいた。両国とも日本語と同じ膠着語であったから、問題はなかった。

しかし、次にネパールに行くことになって、ネパール語の勉強にかかった時、ネパール語が膠着語だと知った時は、正に驚きであった。しかも、ネパール語は開音節の膠着語であるからなおさらのことであった。

わずかな勉強で、ネパールの首都カトマンズの子どもに話しかけてすぐ通ずるのである。（拙論『日本語と英語とネパール語との比較ノート——主として語順及び一人称主語について——』『アジア研究所紀要』第三号、昭和51年12月25日）

インドのヒンズー語はむしろかしくて勉強もできなかったが、学者の書物には、ヒッタイト語と同じく、屈折語でもあり膠着語でもあるということだった。

スリランカ（セイロン）のシンハリ語も膠着語である。（ウイグル語・チベット語・雲南語・ビルマ語も膠着語である。安田徳太郎のレプチャ語も膠着語であろう。）

ネパールのルンビニ——釈迦誕生の地のアショカ・ピラー（阿育王の石碑）の碑文が、当地のプラクリット（パリー語）ということである。解説したところ、これが膠着語だった。そうするとおシヤカさまは膠着語で話をしておられたことになる。

インドの各地の言語をしらべたグリーソンの『インドの言語学的展望』（Linguistic Survey of India, 1927）をばらばら当ててみたところ、ドラヴィダ語（インド南半、タミール語）ムンダ語も膠着語ということになる。

それから、どうしてだったかはつきり覚えていないが、スペインのバスク語が膠着語であることを知った。マラッカから日本に渡って布教したフランシス・ザビエルの故国である。

それで、ヨーロッパ西端・ユーラシア大陸東端の日本と相對するアイルランドのケルト語はどうか、と期待して、いろいろ調べた。『アジア研究所報』にも書かせてもらったが、これはまぎれもなくインド・ヨーロッパ語

であつた。

次に、あまり期待しないで、ヒッタイト語をしらべたところ、これが、ヒンディー語と同じように、屈折語であるとともに膠着語だということがわかつたのである。紀元前十五、六世紀の言語ということである。

以上が私のここ二十数年にわたる「膠着語の旅」の概要であるが、最近、私は大変なことを見落していた、そのことに旅を終って気がついたのである。

前述のように私の膠着語の旅は、日本語の系統論に必要な「音韻対応」の法則の適用をあきらめたところから出発したのである。ところが、日本語の系統について、大野晉博士が、厳密な検証にもとづいて、日本語とタミル語との間の「音韻対応」を証明しておられたのである。

大野晉著『日本語以前』（岩波新書395、一九八七年十二月二十一日第一刷）がそれである。

大野博士は世紀前三世紀頃の「文法書」と世紀前二世紀〜世紀後三世紀にわたる「サンガム」という二五〇〇首の歌を持つ書物によって、タミール語と記紀万葉、八、九世紀頃の日本古代語とを厳密に検討した。そして両者に「音韻対応」関係のあることを証明された。同書には名詞131語、形容詞132〜156語、動詞157〜240語、ならびに文法の比較、——殊に、日本語の助詞、助動詞とタミル語の小辞の比較によって、音韻対応の事実が示されている。

右は、驚くべき発見である。音韻対応の法則を満足させる同系統の言語として、八、九世紀頃の日本語と世紀前二、三世紀から世紀後三世紀のタルミ語とが同系であることが証明されたのである。

博士は内外先駆者の名を列挙しておられるのでこの功を博士一人とするのではないが、ともかく、国語学史上、

また比較言語学史上偉大な業績で、同学の士の必読の書である。

縄文人の言語を考える場合にも本書を見ないで論ずることはできまい。

大野博士の言葉を引用して、私の膠着語の旅の終りとさせていただく。（『日本語以前』終章「アジア東端の日本」より）

「私は、本書の第一章で、民俗的な資料によって、一月一日を中心とする日本の豊穡祈願の儀礼が、南インドのタミル語地域のそれと極めて類似することを明らかにした。そして、死者を葬る儀礼についても類似が見出されることを示した。」

「言語の面からはタミル語と日本語との間に、厳密な「音韻対応の法則」に支持される単語が存在し（二四〇語）、かつタミル語のB.C.二〇〇年頃の言語とA.D.八〇〇年頃の万葉集の言語との間に、助詞（つ・の・が・に・と・て・は・も・か・や）・助動詞（す・む・へる・らる・ぬ・つ・り・たり・む・べし）が音韻法則に支持されて、かつ、ほぼ同一の用法をもって存在することが判明したと、ここに報告するのである。」

内容について私は一々すべて納得した。反論は一つもない。たとへ二、三十箇所の反論があつたとしても、両者の同系統を否定することはできない。

二、アジア諸言語の分類について

——膠着語の見地から——

ヒッタイト語（紀元前十四、五世紀）の概説書として、日本で始めて出版されたと思われる書物の名前は『印欧アナトリア諸語概説』（大城光正・吉田和彦著）（大学書林・平成2年10月30日第1版）と思われる。

ヒッタイト語は印欧（インド・アーリア）語族のアナトリア（小アジア）語派に属する言語となっている。

これは世界の言語学界の定説のようである。

しかし、同書の「ヒッタイト語文法」の著者は、ヒッタイト語が、印欧語族の特徴として語形論の上では「屈折語」であるとしながら、統語論の上では「膠着語」であることを示している。（拙稿「ヒッタイト語の語順（統語法）は膠着語型！」本研究所所報・平成九年二月号、本篇四に再録。）

それで思い出したが、印欧語族に属すると言われているヒンディー語についても似たようなことが言われているのである。

「ヒンディー文法の一つの大きな特徴は語形論の面では英語と同じ程度で屈折語の特徴を保っている反面、統語論の面では日本語と同じアルタイ型であることである。」（土居久弥教授著『ヒンディー語小辞典』昭和五十年第一刷「付録」の「文法篇」同書三四八頁）

また、パリー語についても「インド・ヨーロッパ語族のインド・イラン語派に属し、セイロン・ビルマ・シヤムなどで仏典に用いた言語。プラークリットの一。」（『広辞苑』）とあるが、古代マガダ国のプラークリット（パリー語）で書かれたと考えられるインドのルンビニ（シヤカ誕生地）のアショカ（阿育王）・ピラーの碑文（前二四九年頃）は、明らかに膠着語である。（拙稿「パリー語も膠着語？ルンビニ村アショカ・ピラー銘文の言語」所報・平成二年七月号、本篇三に再録。）パリー語に屈折語的な面があるのかどうか私にははっきりわからないが、もしヒンディー語と同じく屈折語の特徴があったとしても、膠着語であることは確かであるから、屈折・膠着両性質共有ということになる。

南インドのドラヴィダ語（タミル語・カンダナ語・テルグ語）が膠着語であることは、G・A・グリーンソンの大著『イ

インドの言語学的展望』(一九二七年初版、一九六七年一九七三年再版)で語られている。(拙稿『アジア研究所紀要』第十四号「膠着語の旅・抄」)

同書にはムンダ語も膠着語の性質をもっているとしている。

私が調べた限りではスリランカの北部のタミル語はもちろん、シンハリ語も膠着語である。

インドの北、ネパール語は膠着語、ビルマ語は膠着語、チベット語も語形変化のない点ではシナ語と同じく孤立語的だが、統語法的には膠着語である。(拙論「膠着語の旅・抄」)

こう考えてくると、インドの言語はそのほとんどが語順・統語法的には膠着語の性質を共通していることになる。

大野晉博士は、『日本語以前』(岩波新書一九八七年二月第一刷)において、古代日本語と古代タミル語との間に、音韻対応の関係があることを指摘して、両語の同系を証明された。これは比較言語学上の大発見である。その際、大野博士は、音韻対応に並べて文法上的一致(類型学的同一性ならびに助詞・助動詞の対応)を検討・発見している。この「類型学的同一性」とは、主として膠着語的性質の一致の意味である。博士はさらに進んで、「助詞・助動詞の対応」を音韻法則に拠るとしてその一致を証明された。これで、日本語タミル語同系論は完全になったといえよう。したがって、言語同系論が成立するためには、「音韻対応」だけでなく、その文法上的一致が必要であると思われる。

その点サンスクリットがギリシャ語ラテン語と同系であるとするのは、音韻相通・文法上的一致が証明された

からのことであろう。

ところが、ヒッタイト語、ヒンディー語では、ともに統語論上では、「屈折語」と対立すると考えられる「膠着語」の性質をもつものとされている。となると、これを一概にインド・アリアン系といえなくなるのではなからうか。

また言語の分類の上でも、屈折語と膠着語とは相対立するものとして取扱うことが無理になるのではなからうか。

「屈折語」「膠着語」両性質をそなえる言語ということが考えられてくる。

タミル語とか日本語とかトルコ語とかその他、朝鮮語とかモンゴル語とか、「屈折語」をもたない膠着語と、ギリシャ語とかサン・スクリットとか、いわば純粋な「屈折語」と、屈折・膠着共有のヒッタイト語、ヒンディー語とかを考えるべきではなからうか。

別にまたチベット語は語形変化をとまなわないことからすると孤立語であるが、語順からすると膠着語的であるところなので、これはまた孤立語・膠着語両性質共有ということにならうか。

ところで、インドヨーロッパ語族と言われているヒッタイト語とかヒンディー語、パリー語について、これらが文法的には膠着語であることを指摘したのは日本の言語学者である。欧米の言語学者には強く意識されなかったのではあるまいか。それで、語形論だけから屈折語として、直ちにインド・アリアン語族としているように思われる。

これは無理もないことである。誰でも他国語について考える場合には、まず母国語を基準として考えるからで

ある。心理学の創立者W・ヴントのいう「主観的判定の原理」(精神科学の研究方法論)である。

しかし、それが直ちに世界人類に通ずる真実とは言えないのである。ヒタイト語が膠着語だからといって、それが直ちに膠着語の祖語といえないのと同じであろう。膠着・屈折両語法併有の真実を認めることが大切である。そしてそれが膠着語を母語とするわれわれの主張の限界であろう。その上で屈折語を母語とする人々との研究の協力をしてゆかなければなるまい。

以上、言語の分類の上で膠着語・居折語併有の言語のあることを述べた。その上で膠着語の多いアジアの言語を分類してみると、次の通りになる。

膠着語

ウラル・アルタイ語、モンゴル語、突厥語、トルコ語、満州語、ウイグル語、朝鮮語、日本語(琉球語)、雲南語、ビルマ語、ネパール語、パリー語、ドラヴィダ語(タミル語、テルグ語)、シンハリ語、バスク語。

膠着語併有語

ヒタイト語(屈折語) パリー語(屈折語) ヒンディー語(屈折語) チベット語(孤立語)

(チベット語については、一般に言われているところで「孤立語」としたが、チベット語専門のベマ・ギャルボ氏はその著『チベット入門』の中の「チベット語」の項で次のように言っている。「孤立語」と断定するのはむしろかしいかも知れない。「書き言葉は一種類で、同じ発音の語や単語を識別するために複雑な接頭辞と接尾辞がつき、ヨーロッパ語の活用語尾や接統詞に相当する可変小辞がある」

インドネシア語は「孤立語」で、語順は中国語・英語などと似ているという。「孤立語」の分布については本論では取扱わなかった。

三、ルンビニ村アショカ・ピラー銘文の言語は膠着語

昭和五年、ネパールのルンビニに、シャカ・ムニ誕生の地をたずねた。その時、アショカ王（阿育王、前三世紀インド・マガダ国王）の建てた石柱を見て、感動した。

これは、世紀前二四九年のものということである。（『アショカ王碑文』塚本啓祥著一九七六年初版）

その石柱に銘文が刻んである。これは、ルンビニ地方の方言で書いてある、とのことであった。

すると、この文は、時代は降るが、シャカ・ムニの生れた土地の言葉となるから、シャカ・ムニの使った言葉に近いと言えるであろう。

それはいったい、どんな言葉なのか。インド・ゲルマン語なのか？ それとも、タミール語などと同じ膠着語なのか。

ルンビニはネパール国内にあるが、インドとの国境に近い。現在のネパール語は、開音節で膠着語の性質が強いから、アショカ・ピラーの銘文がもしネパール語に近いなら、日本語と文法的によく似た言語ということになる。

そう思つて解説書（E・フルチュ著『アショカ銘文集』Inscriptions of Asoka by E. Hultzsch New Edition, Oxford 1952）一九七七年版）に当たってみたが、一語一語の対応関係がわからないので、語順も文法もわからなかった。

後、本学の佐藤正哲教授の紹介で、山崎元一教授に教えていただいた。対応関係を明らかにしていただいた。それをもとに、『二訂・パリー語事典』（水野弘元著）と首引きで、日本語訳をつけてみた。

次の順序で和訳の次第をかかげる。

④ TRANSLATION

(A) When king Dēvaṇāmpriya Priyadāsin had been anointed twenty years, he came himself and worshipped (this spot), because the Buddha Śakyamuni was born here.

(B) (He) both caused to be made a brick wall decorated with stone (a stone bearing a horse) and caused a stone pillar to be set up, (in order to show) that the Blessed one was born here.

(C) (He) made the village of Lummini free of taxes, and paying (only) an eighth share (of the produce).

⑤

天愛喜見王は、灌頂二十年に、自らここに来て崇敬した。ここで仏陀釈迦牟尼が誕生されたからである。それで石欄を設営せしめ、石柱を建立せしめた。〔これは〕ここで世尊が誕生されたことを〔記念するためである〕。ルンビニー村は租税を免ぜられ、また、〔生産の〕八分の一のみを支払うものとせられる。

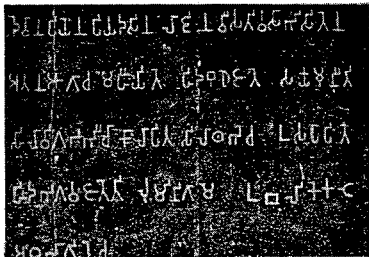
⑥ 英訳との逐語対応関係

- ① (A) Devanā [pi] yena (Dēvaṇāmpriya) Piyadasina (Priyadar-
śin) lājina (king) visati (twenty)-vasā (years.) bhisitena (had
been anointed)
 - ② atana (himself) āgācha (came) mahiyite (worshipped) hida
(Here) Budhe (the Buddha) jāte (was born) Śakyamuni (Sa-
kyamuni) ti (because)
 - ③ (B) sila (stone) vigada (decorated) bhichā (wall) kālapita
(caused to be made) sirā-thabhe (a stone pillar) cha (and)
usapāpita (to be set up, caused)
 - ④ hida (hera) Bhagavam (the Blessed one) jāte (was born) ti
(in order to show) that
(C) Lummini (Lummini)-gāme (the village) u (free) balike
(taxes) kate (made)
 - ⑤ atha (an eighth) bhagiye (share [of the produce]) cha (and
paying [only])
- (注) 下記の語は対応なし
(A) (When) (this spot) (B) (He) (he) of and (C) (He)

⑦ 逐語和訳試案

- 1 (A) Deva(天)na(によって)[pi]ye(愛さ)na(れた)Piya(愛し)
dasi(見)na(られた)laji(王)na(の)visati(20)-vasa(年)bhisite
(灌頂せ)na(られた)(時)
 - 2 atana(自ら)agā(来り)cha(て)mahiyi(崇敬し)te(た。)hida
(ここ)Budh(仏)e(に)jāte(生れた)Sakya(釈迦)muni(牟尼)ti
(故)。
 - 3 (B) sila(石で)vigada(作った)bhichā(壁を)kala(作ら)pita(せ
て)sirā(石)-thabhe(柱を)cha(?)usapā(かかげ)pita(させた。)
 - 4 hida(ここ)Bhagava(世尊)m(が)jāte(生れた)ti(故)。
(C) Lummini(ルンビニ)-gam(村)e(を)u(自由)bali(税)ke
(と)kate(して)
 - 5 atha(八分の一)bhagiye(割り当て)cha(て)。
- 註 cha (both) cha (and) とあるが、不祥。『パーリー語辞典』
に、「-cca=-tya. gar.」として「Kacca(作して)paticca(縁
りて)、vivicca(離れて)」とあるので、単なる接続助詞か
とも思ふが、不祥。

① RUMMINDEI PILLAR-INSCRIPTION



② THE RUMMINDEI PILLAR

- 1 (A) देवानपियेन पियदसिन लाजिन बीसतिवसामित्तिं
- 2 सतन आगाच महीयिते हिद बुधे जाते सक्यमुनी ति
- 3 (B) सिला विगदभी चा कालापित सिलाभमे च उसा
- 4 हिद भगवं जाते ति (C) लुमिनिगामे उवलिके कटे
- 5 अथाभगिये च

③

- 1 (A) Devāna [pi] yena Piyadasina lājina
visati-vasābhisitena
- 2 atana āgācha mahiyite hida Budhe jāte
Sakyamuni ti
- 3 (B) silā vigadabhī chā kālapita silā-
thabhe cha usapāpita
- 4 hida Bhagavaṃ jāte ti (C) Luṃmini-gāme
ubalike kate
- 5 aṭha-bhāgiye cha

かくして、アショカ・ピラーの銘文は、日本語と語順は変わらず、また語法も、格助詞が語尾に来ることや、使役や受身の語が動詞のあとについて、助動詞的な役割をしているらしいことがわかった。つまり、日本語と同類の膠着語の性質が強いということである。

それで改めて、『パーリ語事典』の「パーリ語略文法」を見ると、「格変化」が「語基ー ϵ 」等の形で示されていることや、動詞の文法的機能が、やはり「語基ー ϵ 」等の形で示されること、さらに「曲用、活用の語尾および動詞基等の語尾の表」として、「ー ϵ 」等の形で、二百語くらいの語尾が示されている。

これらが、日本語の動詞・助動詞―活用語尾に該当すると考えれば、パーリ語は、名詞に性の性質のある点（インド・ゲルマン語の性質）は、日本語と全く異なるところであるが、大まかに見て、統語法からすると、日本語とよく似ていると見られる。パーリ語は膠着語であると言えそうである。

パーリ語は膠着語の性質が強いということは、ヒンディー語について述べられた次の説①②から、理論的に推論しうるところでもある。

『ヒンディー語小事典』（土居久弥教授著昭和五十年第一刷）の「付録」の「文法篇」によると、ヒンディー文法の特徴の一として次の通りに書かれている。

- ① 「ヒンディー文法の一つの大きな特徴は語形論の面では英語と同じ程度で屈折語の特徴を保っている反面、統語論の面では日本語と同じアルタイ型であることである。」（同書三四八頁）

次に、『世界言語概説』（昭和三十四年、岩波書店）の「ヒンドスタニー語」（井筒俊彦）に拠ると、「ヒンディー語・ヒンドスタニー語・ベンガル語」等、「現代インドのインド・アーリア語」について、次の通りに書かれている。

②「世間では、ヒンディー語に限らず、ヒンドスタニー語でもベンガル語でも全て現代印度のインド・アーリア語は、梵語を母体としてそれから派生した言葉、或いは梵語が時代と共に変化発展して出来た言葉と考えている人が多く、ヒンドスタニー語の独習書にもよくそのような説明を見かけるが、これは大きな間違いである。此の言語はサンスクリット語直系ではなく、古典サンスクリットと姉妹関係、乃至は文語と口語・俗語の関係にあった諸種のプラークリット(Pra-kṛit)やアパブランシャ語(Apabhrāṣa)から出たものである。」

（前書一八二頁）

（「アパブランシャ語」とは後期プラークリットのことをいう、——同書一三三頁）

右の①②の説に拠ると、ヒンディー語はサンスクリットとプラークリットとの合成であるということになる。古典サンスクリットはギリシャ語と同じ屈折語であるから、ヒンディー語のアルタイ系的文法は、何によって生じたかという点、プラークリットから来た、ということになる。

プラークリットは、ドラヴィダ諸語と同じアルタイ系の言語ということになる。

パーリ語は「古代マガダ地方のプラークリットである」とするなら、パーリ語は膠着語の性質が強いということになる。

結論的なことをいえば、パーリ語、ヒンディー語などは、語形論的には屈折語、統語論的には膠着語ということになるのである。

四、ヒッタイト語（印欧アナトリア諸語の一）の語順（統語法）は膠着語型！

ヒッタイトはいまのトルコ共和国の地、アナトリア（小アジア）に、紀元前十五、六世紀に栄えた古代帝国である。鉄の生産を始めた国として有名である。鉄と軽戦車とで版図を拡大し、エジプトと並ぶ大帝國を築いた。

紀元前十四世紀ヒッタイト王がエジプト王にあてた鉄の交易文（粘土版）があった。それが一八八七年に発見され、一九〇六年にヒッタイトの都市遺蹟から一万枚を越す楔形文字の粘土版が発見された。それが一九一六、七年にチェコのB・フロズニーによって解読され、「インド・ヨーロッパ語族の一派であることが判明、西欧の学会に強い衝撃を与えた。」以来、研究が続けられている、という。（『平凡社大百科事典』その他）

ヒッタイト王国は、紀元前十四、五世紀頃さかんであったが、前一二一五年ごろ滅びた、といわれている。その楔形文字の文章が残ったのである。

トルコ共和国の言語は、印欧系の「屈折語」ではなく「膠着語」である。東アジアの「突厥」（トクケツ・トルク・六世紀）がその先祖で、モンゴル系の民族が何世紀かにわたってアナトリア地に移住した、それがトルコ語の起源である、と言われている。

ヒッタイト語（印欧語族）は絶滅して、膠着語に変わってしまったのだろうか。

ヨーロッパで、スペインのバスク地方（ザビエル神父の故國）のバスク語は、インドゲルマン語とは性質の異なる「膠着語」である。

『バスク語入門』の著者下宮忠雄氏は、

「バスク語は三〇〇〇年にわたる印欧語化の波に抵抗して生き残った西欧における唯一の前印欧語的言語であ

る。」

と、書いている。

アナトリアのトルコ語は紀元後十一、二世紀ごろからであるという。そうすると、それまでのアナトリア地方の言語は何だったのか？

そこに紀元前のヒッタイト語が残っていて、それがトルコ語と融合したのではないだろうか。ヒッタイト語はトルコ語と同じ膠着語ではあるまいか。——これが私の幻想だったのである。しかし、これは事典その他の解説の、ヒッタイト印欧語族説で、成り立たなかった。

ところが、二、三年前のことになるが、テレビのクイズ番組で、珍らしくヒッタイトのことを取上げたことがあった。

たしか「私はパンを食べ水を飲む」というセンテンスだったと思う。その中の「パン」だったか「水」だったかのヒッタイト語がクイズの対象だった。

それはともあれ、センテンスの語順がはっきりと日本語と同じ、「主語・目的語・動詞」SOVの順なのである。印欧語族は大多数がSOVの語順である。

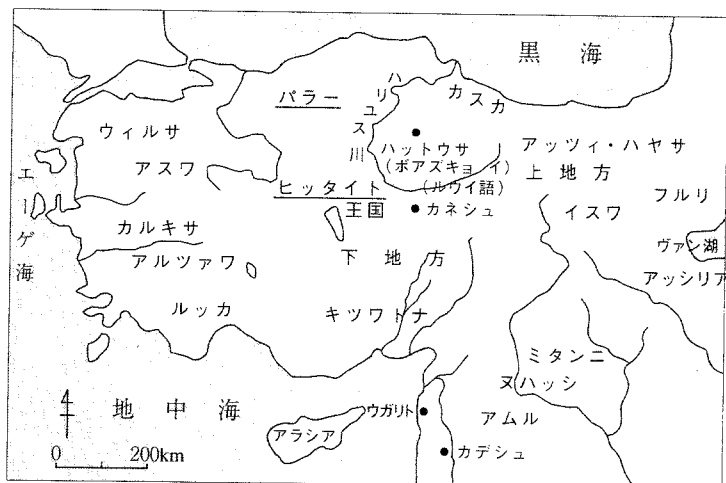
それに力を得て私はあちこち問合せてヒッタイト語の語順の出ている書物（日本語）をたずねまわった。その結果、漸く次の書物に出あうことができた。

『印欧アナトリア諸語概説』（大城光正、吉田和彦著、大学書林刊・平成2年10月30日第一版）である。

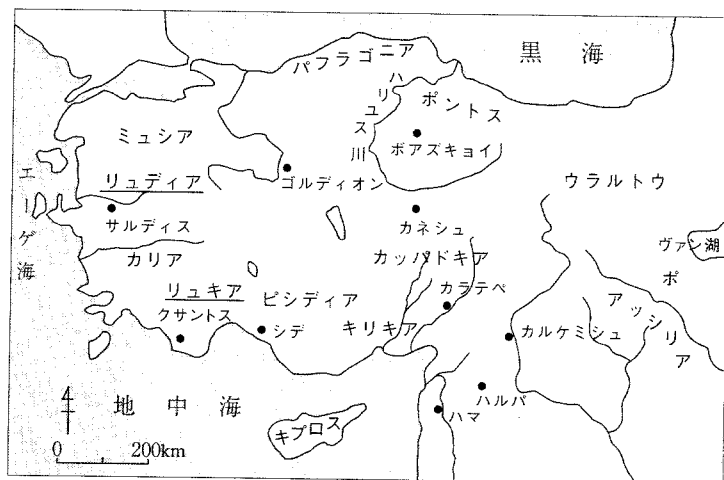
本書は『印欧アナトリア諸語概説』とある通り、ヒッタイト語はじめ印欧アナトリア諸語（ヒッタイト語・パラール語

アナトリア概要図

(ヒッタイト語、パラ語、リュキア語、リュディア語)



ヒッタイト王国時代のアナトリア



紀元前一千年紀のアナトリア

・ルウィ語・リュキア語・リュディア語) について、日本語で書かれた最初の概説書であると思われる。同書の図版、前記の言語名の下に棒線を入れて、引用させていただくと次の通りである。

同書Ⅱ「ヒットایت語文法」によると、ヒットایت語は語形論上は「屈折語」であるとしながら「統語論」では、膠着語型であることを説明している。

「類型論的な立場からみると、ヒットایت語は基本語順が主語、目的語、動詞の順である厳格なSOV言語に属する。したがって名詞句では形容詞や関係詞などの修飾要素は名詞の前に置かれ、動詞句では受身や完了表現における助動詞は動詞に後置する。」

語順が厳格にSOVであり、形容詞等の修飾語が被修飾語の前にあり、受身や完了表現の助動詞が動詞の後に来る、——これでは、ヒットایت語は、膠着語ということになる。

以前、関西学院大学・和田祐一教授の「統語類型論——日本語の位置づけについて」（昭和四十五年『季刊人類学』第一巻第四号）という論文を読ませてもらった。

世界各国言語を語順の上から分類した論文であるが、分類の基準として、次のように述べてあった。

動詞が文頭に来る型をA型とし、文末に来るのをB型とする。前にも後にも来るのをAB型、その他をO型（中国語等孤立語）とする。これでA・B・(AB)・Oにまで分類し、次に語順の性格を(+)(-)に分けA極型(SVO)(-)(-)(-)とB極型(SOV)(+)(+)(+)とに分類する。

A極型(SVO)(-)(-)(-)

①本動詞が主語と一団をなして節の頭部にあり(-)、②修飾語（関係節）が被修飾語（先行詞）に後行し(-)、③前置詞を用い(-)、④形容詞は名詞に後行する(-)。

B極型(SOV)(+)(+)(+)

- ①本動詞が節の末尾にあり(+)、②修飾語が被修飾語に先行し(+)、③後置詞を用い(+)、④形容詞は名詞に先行する(+).

この基準を前記ヒタイト語の統語法にあてはめるとどうなるか。

「基本語順が主語・目的語・動詞の順である厳格なSOV言語に属する。」とあるのは、B型で①は(+)。「名詞句では形容詞や関係節などの修飾要素は名詞の前に置かれ、」とあるのは、②が(+)、④が(+)となる。次の「動詞句では受身や完了表現における助動詞は動詞に後置する。」とあるのは、③が(+)とみてよからう。

つまりヒタイト語はB極型(SOV)(+)(+)(+)ということになる。

これはB極型の日本語、モンゴル語、韓国語、タミール語と全く同じ型の言語、——つまり膠着語ということになる。

ちなみに印欧語族といわれるフランス語・スペイン語・イタリア語等ロマンス語はA(-)(-)(-)。英語・スカンジナビア語・スラヴ語等はA(-)(+)、ドイツ語・オランダ語はAB(-)(+)となるという。いずれもA型もしくはAB型となる。これが印欧語族の統語法である。それに対してヒタイト語はB型極型となるのである。

右のようにみる限り、ヒタイト語は膠着語ということになるが、語形論からみると、まぎれもなく「屈折語」であるというのである。

「ヒタイト語文法」の著者は、次のように説明している。

「他の印欧語と同様にヒタイト語は屈折語であり、形容詞は一般にそれが限定する名詞と性・数・格において一致する。動詞も文の主語と数において一致を示すが、文の主語が中性複数である場合は、動詞は単数形に

おかれる。これはヴェーダ、アヴェスタ（古代ペルシャ語）、ギリシャ語にも見られる現象であり、中性複数形は印欧祖語において本来集合名詞であったことを示している。」

これで、ヒッタイト語が、性・数・格による語形変化をもつ屈折語——インド・ヨーロッパ語族といわれるのも納得がゆく。

結局、ヒッタイト語は語形論の上では「屈折語」であるが、「統語法」の上では「膠着語」ということになる。これは言語の分類上、重要な指摘といわねばなるまい。

アリトリア諸語としてあげられているパラ語もルウィ語も統語論ではSOV型でヒッタイト語に類似する様相——すなはち膠着語型となっている。リュキア語、リュディア語は異なる。

（前項アショカ・ピラーの銘文で解説したように、ヒッタイト語などについて、具体的に文例をあげて解説することは、学力不足で出来なかった。ゆっくり勉強してやってみたい。）

五、「シナ・チベット語族」について

「シナ・チベット語族」(Sino-Tibetan, Tibeto-Chinese)という言葉がある。これは、シナ・タイ語族とチベット・ビルマ語族を包括した言葉として使われている。

世界の言語を大きく分類して、インド・ヨーロッパ語族とか、ウラル・アルタイ語族とか、ハム・セム語族とか言うのである。その一つとして、シナ語とタイ語の系統の言語と、チベット語とビルマ語の系統の言語とを一括して、シナ・チベット語族というわけである。『広辞苑』では次のように説明している。

「しな・チベット・」ぞく「支那―語族」(Sino-Tibetan) 西はチベットから東は中国全土をおおい、南はタイ・ビルマを含む地域の諸言語の総称。中国語・チベット語・タイ諸語・ビルマ諸語はこれに属し、単綴言語または孤立語であることが最大の特徴で、インド・ヨーロッパ語・セム語などのように屈折をしない。」

さて、「シナ・チベット語族」の特徴としてあげられるところを見ると、「単綴言語または孤立語」ということである。李方桂博士の「中国における諸民族の言語と方言」によると、「①単音節的言語であること②声調のあること③有声語頭子音の無声化」などがあげられている。

単音節の言語であることは、それだけで孤立語としての特徴になるのかどうか、それはよくわからないとして、語形変化(屈折語)がないというのであれば、チベット語は孤立語といえるであろう。ではシンタクス・語順はどうであろう？

李方桂博士のあげた特徴はすべて音韻上の特徴であって、シンタクスにふれていない。

語順について比較すると、チベット語は、主語・目的語・動詞(SOV)であるが、シナ語は主語・動詞・目的語(SVO)の順である。ビルマ語はチベット語と同じで、タイ語はシナ語と同じである。

日本語の語順をもとにして、中国語とチベット語を調べたことがあるので例示してみる。

A 日本語Ⅱあれ①は②誰③です④か⑤。

チベット語Ⅱコ① ス③ レ⑤

中国語Ⅱ他① 是⑤ 谁③

B 日本語Ⅱあなた①は②ネパール③語④を⑤話すことが⑥でき⑦ますか⑧

チベット語Ⅱキョ①ペーポ③ヂェ④シンゲ⑥イエ⑦ウェ⑧

中国語Ⅱ你①会⑦说⑥尼泊尔③话④吗

ところで、ビルマ語については、膠着語としての性質の強いことがわかつている。『世界言語概説』（研究社昭和30年初版）の中のビルマ語について説明を行っている矢崎源九郎氏は、ビルマ語の説明をするのに、日本語文法の助詞・助動詞の言葉を使って説明している。例文の語順は日本語とはほとんど同じである。

モンゴル語の権威の木村肥佐生教授（故人）は、チベット語にはテニラハがあると言っている。（『チベット潜行十年』（中公文庫）北村甫氏は、『世界言語概説』の中のチベット語の説明に、チベット語にはやや膠着語的な面があるとしておられる。

シナ・タイ語族とチベット・ビルマ語族とのちがいは、膠着語的な性質の有無によると思われる。そうすると、シナ・チベット語族というのは、音韻関係の特徴から通用するとして、シンタクスの面からすると無理な分類のように思われる。

チベット語は孤立語・膠着語併有の言語となるのであって、欧米の言語学界ならびに日本でもほぼ定説となっているシナ・チベット語族という分類は、膠着語の面から再検討する必要があるのではなからうか。

（亜細亜大学・言語文化研究所報昭和56年より）